

## 議 事 録

- 会議名 第26回佐賀県総合教育会議
- 開催日時 令和5年5月15日（月曜日）11時～12時
- 開催場所 佐賀県庁 新館4階 プレゼンテーションルーム
- 出席者 山口知事、落合教育長、牟田委員、小林委員、加藤委員、  
飯盛（清）委員、飯盛（裕）委員  
（知事部局）進政策部長  
（総合教育会議事務局）前田政策総括監、他
- 議題 「佐賀県教育大綱2023（案）について」意見交換

### 1 開会

#### ○前田政策総括監

定刻となりましたので、総合教育会議を始めさせていただきます。

本日、進行を務めさせていただきます政策部政策総括監の前田でございます。  
どうぞよろしくお願いいたします。

開会に当たりまして、山口知事から御挨拶を申し上げます。

### 2 あいさつ

#### ○山口知事

今日は特にないですけれども、SAGAアリーナがオープンしまして、5月はトライアルフェスということで、ホールの中で子どもたちにいろんな社会体験というか、そういうのをやってもらうと非常に盛り上がっております、そして、例えばオープニングということで、中学生のバレーボールと高校生のバスケットボールをやったわけですが、今までとは違う体験ということで、非常に興奮してまして、やはりなかなか日常ではない体験ということをいろんな場面で体験させてあげることがとてもいいんじゃないかなと思う次第であります。

今日は教育大綱ということですが、大綱案について審議をしたいと思っております。

### 3 内容

#### (1) テーマについて説明

##### ○前田政策総括監

それでは、本日の議題に入らせていただきます。

本日は、佐賀県教育大綱 2023、こちらの案につきまして協議いただくこととしております。

教育大綱につきましては、今年3月に開催しました教育会議で骨子案をお示ししたところであります。皆様から大変貴重な御意見を頂戴したところでございます。

御意見を踏まえまして、今回、教育大綱の案として取りまとめましたので、こちらの内容について協議いただきたいと思いますと思います。

それでは、初めに大綱の案につきまして、私のほうから御説明いたします。

次のスライドをお願いします。

今回の教育大綱の計画期間は、本年度から令和8年度までの4年間となります。ポイントとしましては、「ほめるから、はじめる。はじまる」を推進するとございますけれども、これは日頃から子どもたちの考えや挑戦を最大限尊重する、そして、積極的にほめて応援する姿勢で子どもたちと向き合うと、そういった考えにおいて、骨太でたくましい子どもを育成することを目指すところでございます。

スケジュールにつきましては、本日、大綱案について協議いただき、7月下旬頃に大綱の策定・公表を行う予定でございます。

そして、教育大綱の案ですけれども、本日議論いただく教育大綱の案につきましては、お手元の2つ折りのリーフレットの形になっている資料、このA3を2つに折った、こちらが教育大綱の案ということになっております。

1ページ目には前文としまして、これから佐賀県の教育の目指す姿を「人づくり大県 佐賀」の形で記載をしております。その下に13項目のいろんな基本施策を一覧にしています。

リーフレットの2ページから4ページにかけて、それぞれの基本施策とその取組方針を記載しております。

次をお願いします。

こちらは基本施策と主な取組方針を抜粋して一覧にしたものであります。

先ほど御説明したとおり、大綱案は13の基本施策になっておりますけれども、教育分野が「1 志と誇りを高める教育の推進」から8番目の「佐賀の未来を支える人材の育成・確保」までの8施策、それから、子育て、生涯学習、スポーツ、文化の各施策となっております。

次をお願いします。

ここからは前回の会議で頂きました主な御意見とその対応について整理しております。

4ページですけれども、4ページにつきましては、骨太な子どもに関する意見とその対応について記載しております。

飯盛委員からは、何々しないといけない、してはいけないと言うことが子どもの成長を阻害している。自分で学ぶことを大人がやめさせているという御意見。

また、山口知事の義務教育、基礎的などころを枠で押さえ込もうとすると、人は伸びていかないというような御意見につきましては、大綱の前文、先ほど説明いたしましたけれども、大綱の前文に、「枠」に抑え込まれることなく、トライアンドエラーを重ねながら個性を伸ばしていくと、こういった文言を盛り込むことにいたしました。

それから、落合教育長の子どもたちに肯定的に向き合い、子どもたちの主体性を大事にしていくという御趣旨の御意見でございますけれども、それから、牟田委員の大人になることを楽しみにしていけるようにできればいいと、こういう御指摘につきましては、「志と誇りを高める教育の推進」に、こちらの中に学校と地域の連携・協働による教育活動の充実、それから、佐賀への誇りや深い愛着を持った人材の育成といったような文言を盛り込んだところでございます。

5ページをお願いします。

佐賀らしい大綱に関する意見と、不登校・いじめに関する意見ということで記載しておりますけれども、加藤委員の優しいイメージの「さがすたいる」というワードを施策名に入れてほしいという御意見、それから、山口知事の佐賀の大綱ということで、佐賀らしい言葉を入れるとよいという御意見につきましては、基本施策の名称にそれぞれ反映させることといたしました。

そして、不登校・いじめについてですけれども、飯盛委員のほうからは、保護者と学校側が連携した対応の必要性についての御意見を頂きましたので、「さが

すたいるスクール」の推進において不登校・いじめに対する体制、それから、家庭・関係機関との連携の充実という文言を盛り込んだところでございます。

次をお願いします。

6 ページですけれども、子育てに関する意見と、幼保・小・中の連携に関する意見につきまして記載をしております。荒木委員のほうからは、学校に居場所がない子どもたちにとって、弘道館、それから図書館がセーフティーネットになるのでは。学校と連携して活性化してほしいという御意見がございました。それについては、子育てし大県“さが”の推進に学校、企業、CSO、市町などと連携した多様な学びや体験、交流活動の推進というものを書き込んだところでございます。

それから、飯盛委員の幼保・小・中の連携強化を図るべきという御意見につきましては、「さがん学び」の推進において、この中で、幼保・小・中・高の連携の取組支援、学びの連続性を意識した効果的な指導という文言を盛り込ませたところでございます。

以上が前回の会議に頂いた主な御意見と対応ということになります。

私からの説明は以上でございます。

それでは教育大綱の案につきまして、意見交換をお願いしたいと思います。

荒木委員いかがでしょうか。いかがですか。

○山口知事

これは、教育委員会は何に使うの。これができたらどういうふうにするの。

○落合教育長

これをベースに、具体的な実施計画を別途作らないといけないことになっていきますので、それに落とし込んで政策に反映させていきます。

○山口知事

これは共同で作るの？

○落合教育長

そうです。

○進政策部長

首長が作るのが事実です。これは、この場で議論するということ。

○山口知事

僕が作れるんだ。だったらさ、もっとさ、この前文にいいこと書いてあったけど、これは前文すごくさ、この前議論したことがそのまま書いてあってさ、だけど、結構、普通になっちゃってて、全体がこれもう。

だから、経験を積むということの大事さというか、と思うんだけど、それがさ、実際に現場に行ってみると、ほかの校区に行っちゃいけないとか、アルバイトしなきゃいけないとか、規制のオンパレードで、学校がそこまで規制する必要があるのかと。それは家庭とか社会が考えてもいいんじゃないかと。何で学校なのに、ふだん、子どもが学校からやっちゃいけないとかって、そこまでやる必要があるのかと俺は思っているんだけど、俺が決めていいんだろ、ここの前文に書いてあることと、この具現化が、極めて普通にニュートラルになっちゃっていて、問題提起すらしないと、何か誰も今までと変わらんんじゃないかと。どんどんどん教育委員会は現場に入るほど「普通だね」「今までと同じだね」ってなるんじゃないかというふうに思いますが。

○前田政策総括監

ありがとうございます。

確かにこの基本施策の13項目については、県のマスタープランである佐賀県施策方針の中に書いていることから引用しているようなところもありますので、確かに前文にあるとおり、尖ったといいますか、ここ自体を具現化するという視点が抜けておりましたので、それは最後、この中に盛り込んだ形で……

○山口知事

遠慮しなくていいんじゃない。逆に強過ぎたら俺たちが、さすがにそれは強過ぎだろうと。

○落合教育長

基本的な姿勢としては、今、知事からもあったように、今年は「ほめるから、はじめる、はじまる。」と言っていますけど、主体性をもっと大事にしていこうという姿勢でいますので、まさに同じ、我々の基本的な考えではあります。具体的な取組がなかなか目に見える形になっていないのがあるので、そこをどう反映していくか、政策部と相談させていただければと思います。

○山口知事

これって、教育のこの中身ってさ、教育の中身に関することを知事が決めちゃっていいのかい。

○前田政策総括監

地方教育行政の組織及び運営に関する法律でそういうのが求められております。

○山口知事

そうなんだ。昔は、あんまり教育に口を挟んだらいけないって、首長はって、そうやって育ってきたんでさ。

○前田政策総括監

平成 27 年に法律が改正されまして、教育行政も、やはり福祉とか、地域振興との関係が非常に強いということで、そこは選挙で選ばれた首長と、自治体の長と教育委員会でいろいろ協議をして。

○進政策部長

具体的な教育内容までは踏み込んでいないの。

○山口知事

俺がさっき言っていたことは悪くないんだ。大きな方向性とか。具体的に首は突っ込まないけどさ。

○落合教育長

大綱をこの総合教育会議の場で揉んで、これで知事が決めるという構図になりますので、それを踏まえて、我々は具体的な施策に落とし込んでいくということになります。

○山口知事

ということは、ある程度、ぶっ刺さったほうが仕事しやすいよね。

○落合教育長

刺さった方向を打ち出すためにはですね。

○山口知事

そう。で、さすがにそこはちょっと違うよねと言ってもらってもいいわけだ。  
逆に言えば、教育大綱に書いてあることというのは、学校とかはそこに従う義務はないな。

○落合教育長

大綱ですから、教育の大枠組みを決めていますので、それを踏まえて具体的に落としていくと。反することはできないのですね。

○進政策部長

最終的には定めますよね。だから、そのためにこの場で話して、最後は知事が決めますけど、何かこのクッションが。

○山口知事

じゃ、クッションがあるということだったら、前文に書いてあることは、この前、大分みんな一致したところで、それをちゃんと具現化してほしいなど。

そうしないと、これは前文だけだから、表紙とあれを何か、家庭、地域の教育向上とか、どこの県でも一緒なことばかり書いてあって。

○落合教育長

確かにそうですね。

○山口知事

長崎県の中でも福岡県の中でも一緒だから。

○落合教育長

ここのタイトルベースでそこまでとんがった形は書きづらいところがあります。

ただ、精神としては、さっき知事から御指摘があったような子どもの主体性を大いに引き出していこうという精神は、いろんな場面で我々としては具体化したいなと思っています。

○山口知事

言うならば、さっきの飯盛さんが言っていた小・中・高の連携を、俺らの、大学と連携したらいいんじゃないかと言ったわけだよね。幼・小・中・高・大。

○落合教育長

確かにそれは県立大学を待つまでもなく、佐賀大学にしても、西九州大学にしてもそういったところですね。

○前田政策総括監

委員の皆さんの意見を。荒木委員お願いします。

○荒木委員

先ほどの意見で、昔はよく高大接続といって、高校と大学が連携するということを言っているんですけど、今、その専門の中では中・高・大、中高一貫も増えていますし、もう中・高・大の次に行きましょうとなっているから、流行りじゃないですけど、最近のトレンドというか、高・大じゃちょっと遅いですよねみたいな流れにはなっているかなと思います。



○前田政策総括監

飯盛委員をお願いします。

○飯盛（清）委員

不登校の問題は深刻です。もう問題になり始めてかなりたつと思うんですけども、学校に来ていない子どもたちに学校がもっとケアをなささいということで、担任の負担がものすごく増えてきて、じゃ、それをサポートするために支援員を入れましょうということで、不登校に特化した支援をする職員の方が今入ってきたわけですね。そうすると、さっき私が言ったということで入れてもらった文言は、当たり前のことと言えば当たり前のことなんですね。家庭、地域と連携していけばという。そこが何となく人間が増えたことによって、教員の負担は減ったけれども、その支援員の方にお任せになって、連絡が取れなかったりとか、学校に行かないことも選択肢の一つですよという時代の考え方が出てきたために、学校の教員の中にはあんまり上に、こっちに引っ張っちゃいけないんだと、学校に行こう、行こうとあまり言っちゃいけないんだというようなことを、勘違いと言ったら言い過ぎかもしれませんが、そういう風潮があって、もうかなり言われ出して、改善はしたことないですよ、増える一方で。これは多分これからも一緒じゃないかなという気がしています。

だから、そういう意味で連携をして、一番よく分かっているのは担任であり、保護者であるので、そこら辺りしっかり話合いをして、引っ張るべきときには学校に引っ張って、保護者も出すべきときには押し出してということをやっていく必要があるといつも思っています。

ちょっと前になりますが、ひきこもりが全国で百四十何万人だったですか、不登校がそういったことの原因の一つでもあるのかなと、そういうふうなことを考えていますので、やっぱりそういったことを学校、校長なり、市の教育委員会なり、県の教育委員会も少し、もうちょっと引っ張ってもいいんじゃないかなというような思いを私はいつも持っております。

以上です。

○前田政策総括監

ありがとうございます。

加藤委員どうですか。

○加藤委員

先ほどの不登校に関する件ですけど、改善していないということは、見直しをしていくことが大事かなと。それをそのまま、していないものをしていないまま進めていくということが先につながらないのかなと。何ですかね。言葉かけでも、大人ベクトルなんですよね。大人はこれがいいと思ってかけているんだけど、それを子どもの側に立ってみると、僕そうじゃないよとか、思っていることが分からないまま進んでいっているというような感じが、ちょっとメンバー見てて、します。

○飯盛（清）委員

もう一点、関連でいいですか、思い出したことが。

発達障害とっておられる子どもさんが、そういう保護者の方はなかなか、例えば、仕事にも行きづらいとか、子どもが帰ってきたときですね、だから、放課後デイサービスというような呼び方を多分しているところが多いと思うんですが、そういう子どもさんを預かるところができていまして、どんどん増えている。そういう保護者の方は非常に助かっているというお話があります。

ところが逆に、助かって問題がないから、本当はその子どもさんが学校で困っていること、困り感が、学校でいくら学校側が保護者に伝えても、家ではそんなことないですけどもね、で終わってしまうと。で、小学校、中学校、高校を出るまではいいんだけど、社会に出た後どうする、そこまでの支援体制はまだ日本はできていないと思いますので、そういうことも、さっきの支援員をつけて学校がちょっと手が軽くなったということはいいいんだけれどもというのとちょっと似たようなことを感じる場合があります。

以上です。

○前田政策総括監

ありがとうございます。

#### ○加藤委員

すみません、私もちょっとそれにつけ加えますけど、小学校なら小学校で一生懸命頑張っていると思うんですよね。中学校は中学校で頑張っているし、私は子どもを育てるという意味では、ウェルビーイングの視点を持って、子どもというのは、小学校が終わったらそれで終わりじゃなくて、ずっと人生は続くので、そこのウェルビーイングの視点でもっていけば、その子が将来どういうふうに生きていけるかという視点を持って育てていく、次につながっていくので、ちょっとそういったところの視点がもう少しあればいいかなと思っています。つなげていくために何をするかということじゃないかなと思います。

#### ○前田政策総括監

ありがとうございます。

飯盛委員いかがでしょうか。

#### ○飯盛（裕）委員

先ほど、飯盛（清）委員から支援についてのお話を伺いましたが、確かに未就学児でも支援がますます必要とされており、その認定は市町の管轄です。市の相談員の皆さんには頻繁に巡回していただいております、支援会議の開催も増加傾向にあります。支援が早急に必要な子供たちを早めに見つけ出すという点については、担当の保育職員たちも日々心掛けています。色々な方法がありますが最終的には保護者にどのように伝え支援に繋げていけるかが非常に重要です。

今回、幼保小連携の強化を大綱に盛り込んで頂きましたが、幼児教育と義務教育の連携は非常に必要だと感じています。小学校訪問でよく聞くのは、小学校の高学年になってから支援が必要となってもなかなか繋いでいくのが難しく、それでは遅すぎるとの意見もあります。そのため、できる限り早い幼児教育の段階で支援の必要性を把握し、それを行政や小学校に引き継ぐことが非常に大切だと考えています。

その他にも、外国籍の子供たちが増加しており、彼らに関する情報を幼児教育施設、小学校、中学校、高校といった各学校間で共有し、彼らが適応しやすい環境を整えることも重要だと思っています。

○前田政策総括監

ありがとうございます。

牟田委員いかがでしょうか。

○牟田委員

ちょっとずれるかもしれないんですけど、さっき、飯盛（清）さんと雑談しているときに、子どもの数が減ってきているのに発達障害みたいな子どもがずっと増えてきているのは何でだという話をしている、それは各家庭の子どもが、僕らの頃は4人も5人も子どもがいるのが普通だったのが、今は一人っ子の子が多分多いと思うので、小さいときに社会性が育成されないというか、ほかの子と接することが少なく、親の管理のほうが多いんじゃないかという話をちょっとしていたんですよ。

子どもを増やせというのはまた別の問題になるので、今の前提のままいくと、さっき知事が言われたように、逆にあんまり世話を焼かんと、自由にしなさいとやっておいたほうがよろしいんじゃないかというのは、これは僕の意見、飯盛（清）さんは別な意見かもしれないですけど、僕は今の少子化の時代で社会性を育むためには、知事が言われるように、好きなところに出ていけとか、校則は廃止派だからあれだけど、あんまり厳しくせんとか、だから、かわいい子には旅をさせよと、まさにそれが当たっていて、もっと自由にさせて、いろいろな経験をさせていくというほうがよろしいんじゃないかというのを思った次第です。ちょっとずれましたけど。

○前田政策総括監

ありがとうございます。

○山口知事

何かね、僕が企業とかいろいろ回るじゃないですか。そうすると、工場とか行くとき、高校を卒業してそのまま工場で働いている子がいるわけよね、いっぱいね。高校までいろんな経験をしていない、学校がきつく規制し過ぎて。俺はもっといろんなことをやらせてあげたいなって。

○牟田委員

やっぱり子ども、一人っ子、二人でもいいけど、少なければ少ないほど親の監督というか、目が、監視が行って、型にはめちゃうのよ。

○山口知事

親が強過ぎる、そこも親のチェックが厳し過ぎるというところもあるし、学校の守備範囲をどこまでするのかということのを改めて考える必要がある。

これさ、思うけど、これからの5年間でしょう。

○牟田委員

4年間。

○山口知事

4年間。その時系列的なフォローというのがあるんなくて、例えば、今は本当にこれは国際社会だから、今は幼稚園とか小学校なんて海外からいっぱい入ってくるでしょう、ばーってさ。それに要するに間違いなくなかったことになっていて、そういったこととか、今コロナでずっとマスクしていた人たちがどうするんだよということとか書いたほうがいいんじゃないの、コロナの後の社会で、これからの4年間なのにさ、そんなことに全然触れないでさ、何か昭和のときみたいじゃん、これじゃ。

だから、今、時代が変わっている、今この4年間に留意すべきことを、決めつけしなくてもいいから、このコロナのおかげでマスクの後をどうしていくのかとか、国際とか人権とか、そういったものをみんなどうやって養っていくのかとか、夜間学校も、国際の子がいっぱい来るよね、日本語教育ってすごく大事だからさ。それをどうしていくのかとか、今問題になっていることをちゃんとストレートに書いていって、結論をやるのが怖かったら議論すべきでもいいんだけどさ、していかないと、だから、きれいにきれいにして、結局何も変わらないという、ただ4年ごとにチェックしているというだけ、普通の県みたいじゃん、これ。

○前田政策総括監

今、まさにこれからの4年間という形で。

○山口知事

だから、それぞれの4年間があって、どういう4年間なんだろうという大きな大局観を持って考えていかないと。

○前田政策総括監

これからの4年間でいろいろ構想していく中で、こういうのが必要だということをして落としこんで。

○山口知事

コロナって入れなきゃいけないでしょう。明らかにコロナ、コロナの後の4年間でしょう、これ。コロナのときに問題が起きたやん、いろいろ。特に幼保とかさ、マスクしてさ、ずっと過ごしていたわけ。情操教育なんて、俺は57年も生きてるから、たかがそのうちの2、3年になるけど、8歳とか7歳とか3年間マスクしてるって、とんでもなく影響あるよね。

○荒木委員

外さないの、外せばと言いたくなるような……

○山口知事

だよ、そうそう。

○飯盛（裕）委員

給食中もまだ黙って食べたりされてますよね？

○山口知事

ねえ、ほら。給食のときが一番やかましかった、俺たちの頃は。

○飯盛（裕）委員

楽しい給食なんですけどね。

○山口知事

そう。だから、そういうことの問題点、いずれ必ず出てくる可能性があるから、そこを解消してやらないと、今から。そういう問題点がありますね。

○飯盛（裕）委員

小学校とかではまだ食事中、静かに食べましょうみたいな感じなのでしょうか？

○落合教育長

いや、今、黙食は言っていない。言っていないけど、雰囲気はまだ完全には変わっていないですよ。

○山口知事

だから、落合教育長が頑張ったらしいけど、マスク取れないよね。

○落合教育長

かなり言っています。でも、5月8日の前後の、4月と5月でずっと学校訪問をしたんだけど、5月に行った何校かはちょっと変わっていました。ただ、ある学校では、男子はほとんど外しているけど、女子は9割以上していると。学校によって性別というか……

○山口知事

大人はつけていてもいいと思うんだけど、中学生、高校生とかはできる限りね。

○落合教育長

そこはちょっと改めてこっちからも働きかけをしようかなと思います。

○山口知事

そういうような問題点とかがあるんじゃないかな、そういう時代背景的なものが。これからの4年間、そこをよくみんなで見していこうぜって、参考書とかでも先生方がああ、そうだよなど、バイブルみたいにさ。佐賀の未来を創造する連携事業の推進とか、普通の言葉だけど。勇気要る？コロナって書くとか。

○前田政策総括監

これまではですね、教育大綱ですけれども、30 ページぐらいある書き物で作っていたんですけれども、今ほとにかく伝わりやすいように、分かりやすいようにということで、この1枚紙にしましたので。

○落合教育長

この下は結構そういうことも入っているんだけど、何かその目次みたいになっているので、なかなかそこは表現しきれしていない。

○山口知事

独自のメッセージを加えたほうがいいかも。

○前田政策総括監

もう少しこう何をしてもらいたいのか、したいのかということが伝わるようにもっと……

○山口知事

伝わるというか、ちゃんと、新しい4年間でしよう。佐賀の子どもたちをどのようにしていくのか。もちろん、結論が出てない問題点もあるから、こういう論点はぜひ考えていくべき問題だとかさ、どんどんどんどん学校のやることが肥大化しててさ、そこまで学校にとって、逆に言えば学校も行けない子は今はひきこもってるからさ。それはそれで課題があると思いますけど、だから、学校の存在って俺たちの頃みたいに莫大じゃなくていいんじゃないかと思う。全部負わしちゃっている。

○落合教育長

我々のとき以上に肥大化している、学校に期待がそれだけ大きいのかもれないですけど。



○山口知事

期待ね。

○牟田委員

学校に福祉面を求めるようになってみたりとかね。

○山口知事

そうそう。

○落合教育長

さっき、地域との連携というのが出ましたけど、いろんな場面において連携なんだけど、役割分担もあるんですね、学校だけが全てを背負っていくわけにはいかないの。

○山口知事

学校の先生は酷だぜ。悪いけど、俺たち大人になると分かるけど、学校の先生はスーパーマンじゃないからさ、子どもにとってみればスーパーマンに見えるんだけど、実はそうじゃない、普通の俺たちと同じような普通の人だからさ。

○前田政策総括監

ほかに御意見ございませんか。

○飯盛（裕）委員

今、知事が述べた内容に関連して、昨日、飯盛（清）委員とお話しする機会がありました。子育て中の現場の教職員からさまざまな意見を伺います。教育に携わる彼らもスーパーマンではなく一人の人間であり、子育てと仕事の両立ができ、楽しみながら教育という仕事に取り組める環境を整えていかねばなりません。しかし、現実はその簡単ではなく、仕事を整理し、今ある業務を断捨離していく必要があると強く感じています。

教育のDXに関しても、最近、国の補助金のおかげで幼児教育においてはICTが進化し、紙媒体の連絡帳やおたよりが無くなり、代わりにアプリを通じて保護

者とのコミュニケーションが行われています。しかし、小学校に進学すると、紙媒体の連絡帳になり、保護者も教師も手書きでのやり取りに戻ります。この点についても改善の余地があると感じています。

○落合教育長

思うように進んでいないですね。

○飯盛（裕）委員

あまり進んでいません。デジタル化は積極的に進めるべきだと考えています。幼児教育の現場がデジタル化できているなら、小学校や中学校も同様にデジタル化できるはずです。現在でも、アンケートなどがまだ紙ベースで使われており、これをデジタル化する事で教職員の業務の負担は軽減されると思います。

○山口知事

雑談じゃないけどさ、学校関係あるあるでさ、毎年同じものを書かせたりするの、紙。

○落合教育長

それも改善しないといけないと思っています。

○山口知事

家の地図とか去年書いたと。

○進政策部長

我々なんかもそうですけど。

○飯盛（裕）委員

私の法人の職員にも通勤届けを提出してもらっていますが、デジタル化しているので書く必要がなく、地図も書くかわりに Google マップの印刷版を添付して提出しても OK にしています。しかし、小学校の場合、家庭調査票などに今

でも住所の地図を書くよう求めているところも多いのではないかと思います。

○落合教育長

そういうところも改善する余地は多々あります。アナログをもってよしとしている文化もあって、先生もかもしれないけど、保護者の方。

○山口知事

それなら、思いっきり変えちゃえばいいのよ、そういう細かい話。そしたら、良い大綱というか、なるほど、こんなことまでチェックポイントがあるんだとかかさ。

○飯盛（裕）委員

逆に大綱の中に明確に書いてあると変わりやすいかもしれませんね。

○山口知事

変わりやすい、書いてあるもんねと、みんなで。

○前田政策総括監

よろしいでしょうか。

○飯盛（清）委員

さっきのあれにちょっと戻るんですが、東日本大震災のときに生まれた子どもたちが今、中学校に上がる年ぐらいですかね。多分、幼少期に過ごした頃のこと、ずいぶんと、いろんな今までなかったような例が出てくるんじゃないかなというふうなことを読んだことがあるんですが、このコロナの3年間、やっぱりさっき知事がおっしゃったように、本来あるべきような行事がなかったりとか、日常生活でもいろんな支障を受けてきていますので、特に中学校、高校の3年間、マスクでずっと過ごした学年というのものもあるわけですから、そういう子たちのこれから先を見据えていろいろなことを考えていくというのは大事なことじゃないかなという気がします。

○山口知事

俺は考えられない、高校時代にずっとマスクだったって。今、高校のときの連中みんなでさ、あの頃はああだったと言えているのは、あれがマスクだったと思うと考えられない。

○落合教育長

女子がほとんどつけていたのはびっくりしましたね、高校で。

○山口知事

女子はやっぱり多い。

○落合教育長

多いです。その学校は、2校のうち、片方は全体がつけていましたよ。片一方は、男子は外しているけど、女子はほとんどつけている。

○山口知事

そういうところで先生が。

○荒木委員

やっぱり同調的ななんか。

○落合教育長

大学生はどうですか。

○荒木委員

大学生は、ある一定だけで、女の子はやっぱりしていますね、どちらかというと。

○落合教育長

そんな感じですね。

○荒木委員

同調圧力というか、本来の予防の意味は通り越した使い方をしているのかなと。

○落合教育長

その雰囲気はどう変えていくかというのは我々の仕事かも。

○山口知事

そうか。だから、抵抗がある。

○落合教育長

あるんでしょうね。

○山口知事

8割、9割を占めている中で。

○落合教育長

はい。

○加藤委員

何か取るのに勇気が要りますよね、多分。何というんですかね……

○飯盛（清）委員

あの雰囲気だったら、多分取るのに勇気がいらしますよ。

○山口知事

いつになるの。

○落合教育長

少しずつ、少しずつ様子を見て。

○荒木委員

そうですね、少しずつ。

お恥ずかしい話なんですけど、中1の息子が「お母さんマスク買っておいて」って言われて、「あんたいつまでつけると」と言ったら、「お母さんは僕が仲間はずれになってもいいの」と。そういうふうに言われてしまって、そうですかとうちの母と話していました。

○落合教育長

そういうのがあっているんでしょうね、子どもの中で。

○山口知事

いっせーのせでやるか。

○落合教育長

言いたいんですけどね。そこは非常に難しい言い方。つけている子がいづらくなっていないかということがある。

○山口知事

なるほど。じゃ難しいな。でも、この問題ってすごい日本の社会のむずかしさを。

○落合教育長

先生が子どもに言うのも難しい、我々が学校に言う言い方も難しい。外していんだよというのを一生懸命言っていくしかないかな。

○飯盛（裕）委員

一旦ちょっと外してみようというのを了解したら。

○進政策部長

この授業は外して受けて見ようとか。

○山口知事

どうしてもつけたい、花粉症の人とかいるわけやろう。

○落合教育長

そういう人はいますからね。

○山口知事

だから、そこがやっぱりあるから、言いにくいよね。

○落合教育長

はい。だから、強制はできない。でもだんだん時期がたつと、夏に暑くなったときにどうなるかですね。

○山口知事

暑くなってくれば取りたくなるよ。難しいね。その問題点は入れたほうがいいよ。

○前田政策総括監

そうした視点でちょっと項目を加えたいと思います。

ほかに何か御意見ございますでしょうか。よろしいでしょうか。

#### 4 閉会

○前田政策総括監

本日も貴重な意見、いろいろありがとうございました。御意見を踏まえまして、改めてこの大綱の中身については事務局のほうで内容をまた検討したいと思います。

それでは、本日の会議をこれで終了させていただきます。ありがとうございました。